

第 324 回くらしの植物苑観察会 令和8年9月26日（土）

「衣になる植物」

玉井 里奈氏（千葉県環境生活部スポーツ・文化局文化振興課副主査）

山本 伸子氏（千葉県立中央博物館 上席研究員）

いま皆さんが着ている衣服は何でできているのでしょうか？くらしの植物苑では、衣類となるさまざまな植物が栽培されています。これらは、繊維を利用して布となるものと、染料として使われるものとに分けられます。

布の原料となる植物として代表的なものがワタです。はじけた実を収穫し、種を覆う「種子毛繊維（しゅしもうせんい）」を紡（つむ）いで糸にし、撚（よ）りをかけ、それを織って布にします。効率よく繊維を取り、紡ぐために綿繰り機や糸車などの道具が利用されました。

衣類に利用される麻は、亜麻（あま）、苧麻（ちょま・からむしともいう）、大麻などがあり、これらは茎の「靱皮（じんぴ）」部分の繊維が使われます。細く裂いた繊維と繊維を結んで繋げ、長い糸にしていきます。これを「績む（うむ）」といいます。現在も南西諸島で生産されている芭蕉布（ばしょうふ）も茎の繊維を利用したもので、糸芭蕉の茎を煮て、裂き、績んで、撚りをかけ、糸にしていきます。績む作業には、繊細さと根気が必要です。

染めに使う植物ではアイ（タデアイともいう）が有名でしょう。浅葱色を出せる「生葉染め」もありますが、アイの葉を発酵させた「すくも」を灰汁などに溶かして作った染液に布を浸して染めると深い藍色が出ます。



ワタの実



藍染めの反物（絹地）

〔くらしの植物苑で観察できる「衣になる植物」の一例〕

布の原料	染料として使うもの
ワタ、麻（からむし、リネン）、バショウ など	藍、紅花、クチナシ、クワ、アカネ、檜皮 など

※時期によっては観察できないものもあります。

江戸時代中期から明治時代にかけて、九十九里地域は木綿や藍の生産地でした。この地域で獲れるイワシを加工した干鰯（ほしか）や𦉰粕（しめかす）を肥料に、温暖な気候も味方して、ワタの栽培が盛んに行われたのです。生産された木綿布や藍は江戸などに出荷されました。やがて庶民の普段着は、従来の麻などに木綿が取って代わっていきました。

木綿の布に藍染めをほどこすのは「紺屋（こんや・こうや）」と呼ばれる職人たちでした。房総半島の紺屋の仕事の一つとして、漁師が大漁を祝って注文する着物「万祝（まいわい）」作りがありました。木綿あるいは絹の反物に鶴亀や魚介（イワシ、ブリ、タコ、アワビなど）を描き、藍で染めて仕立てた万祝は、庶民の普段着とは一線を画す、鮮やかな着物です。魚肥で育てられたワタやアイが、大漁を祝した着物として形になるというのも面白いですね。

.....

次回予告 第325回くらしの植物苑観察会 令和8年10月24日（土）

「くらしの植物苑から学ぶ縄文時代の植物利用」

工藤 雄一郎氏（学習院大学 日本文化学科 教授）

13：30～15：30

国立歴史民俗博物館 暮らしの植物苑 東屋 定員30名程度